

# 国語

(第一回)

## 注意

- 一、受験番号・氏名は、問題用紙・解答用紙ともに記入すること。
  - 二、解答は、すべて解答用紙に記入すること。
  - 三、携帯電話など音が出るものは事前に電源を切り、試験の妨げさまたにならないようにすること。
- 万一、この注意事項を読んでいる時に電源の切り忘れに気付いたら、必ず監督者に申し出ること。

受験番号


番

氏名

--

一次の各問に答えなさい。

問一 次の①～⑤の傍線部を漢字で正確に答えなさい。

- ① 絵画をヒヒョウする。      ② 競技場にカンシュウが集まる。      ③ ショウガイ事件として捜査する。
- ④ 長い時をへる。      ⑤ 罪人をサバく。

問二 次の①～④の傍線部の漢字の読みをひらがなで正確に答えなさい。

- ① 恩に報いる。      ② 朗らかな歌声。      ③ 城下町の歴史を探訪する。      ④ 秘術を会得する。

問三 次の語の組み合わせが類義語になるように、に入る適切な漢字一字を答えなさい。

- ① 賛成・意      ② 欠点・所      ③ 音信・息

問四 次の①～③の傍線部と同じ働きをしている言葉を後のア～ウから選び、それぞれ記号で答えなさい。

① 合格して晴れやかな気持ちになる。

ア、まだ昼前なのに空腹だ。      イ、おかしな考え方。      ウ、母は有名な音楽家だ。

② 図書館に本を借りに行った。

ア、先生は静かに語り始めた。      イ、兄は都会へ働きに出た。      ウ、花はとうに散った。

③ 冬休みが終わって新学期が始まる。

ア、夕日を見たくて海に行った。      イ、顔を上げてじっと聞き入る。      ウ、彼は明るくて社交的だ。

二次の文章を読んで、後の各問に答えなさい。

質問をする能力というのは、「私には分かりません」と認識する能力のことを言います。私にはここが分かっている、理解できていない、という自覚があるから、そこを質問するのです。質問とは、「私には分からないことの自覚」に他ならないのです。

逆に言うと、「質問する能力」が低い人というのは、「私にはここが分かっている」というところが分かっている人なわけです。これはギリシヤの哲学者ソクラテスのいう「無知の知」が欠如していることを意味しています。

「私にはここが分かっている」ことが分かっているという事は、その人は自分の持っている知識体系「だけ」で勝負していることを意味しています。自分の知っている世界が世界のすべてなわけです。その世界の外にどのような世界が広がっているのか、まったく分からないし関心もない。要するに「井の中の蛙<sup>a</sup>」ということなのです。

政治学者の丸山眞男は、このような「自分の知識体系の世界にのみ満足し、その世界の外には関心を持たない状況」を称して、「タコツボ」と呼びました。「無知の知」がない「井の中の蛙」です。

「井の中の蛙」の厄介なところは、自分たちが「井の中の蛙」であるという自覚がないことです。自分たちの知っている世界が世界のすべてなので。知識の総量がたとえ小さくても、「自分はこんなに知らない」という自覚があれば、その世界はいくらでも広げることができます。しかし、いくら知識の総量が大きくても、その人の持つ知識の外の世界に無自覚であれば、それは「単なるもの知りなバカ」でしかありません。

医者は長いこと、大学医局制の縦割りのもとで、自分たちの診療の外にある世界についてまったく無自覚、無関心でした。心臓なら心臓、腎臓なら腎臓という、臓器の専門性だけをタコツボの中で維持していればそれでよかったです。また、タコツボの外の人たちは、タコツボの中の診療に口出しすることはまかり通らないような仕組みになっていました。だから、医局の中の人はやりたい放題できましたし、その質が低くても、誰も問題にしなかったのです。

しかし近年、医学の専門性が飛躍的に高まり、「タコツボの中」の知的体系だけでは医療を遂行することはできなくなりました。

例えば、感染症です。いくら心臓に詳しくても、いくら腎臓に詳しくても、心臓の病気、腎臓の病気を持っている患者も感染症になります。例えば肺炎になったりするわけですが、「タコツボ」の時代であれば、その肺炎の診断や治療は「やつつけ仕事」でできたのです。適当に、出入りの製薬メーカーが薦める抗生物質を使って、「X」ことが可能でした。

しかし、患者の意識も高まり、医療情報が開示されるようになると、閉じた空間で好き勝手やる時代は終わりました。タコツボの世界で医療をやっていく時代は終わり、「感染症のことは感染症のプロに相談して」という「チーム医療」が芽生えました。チーム医療は、医学知識が飛

躍的に増加し、患者の意識が高まり、情報公開が進む現代において、必然的な産物だったのです。

厚労省や文科省の官僚たちも、同じ「無知の知」の欠如を構造的に持っています。

官僚たちは、通常2年程度で部署が変わってしまいます（最近では例外的に、同じ部署に残る人もいるようですが）。部署が変わると、官僚はその領域のスライドなどを渡され、知識を詰め込まれてにわか仕込みの「専門家」を名乗るようになります。

官庁にはさまざまな情報が集まってきました。この情報量が、かつての官僚の武器でした。情報は武器です。周りが知らない情報が集中する官僚たちは、その圧倒的な情報量で、他者に対する優位性を保っていました。

官僚たちに会ったとき、彼らが口癖のように言うのは、「それについては分かっています」という全能的な答えです。官僚には構造的に情報が集まってきましたから、彼らはたくさんの情報を持っています。

A、すべての質問について、「それについてはこうなっています」という説明ができます。思い出してください。官僚たちの多くは受験に成功し、(最近廃止されましたが) 国家公務員I種試験に合格した「質問に答える達人」なのです。

「現在の抗菌薬の適正使用の問題ですが……」

「ああ、それについては分かっています。現在は加算の制度がありません」

という感じで即答されます。すべての問題について、回答があらかじめ与えられているかのようです。B、彼らは「質問に答える」ことにかけては、ずば抜けた才能と訓練を有していますから、すぐに「答え」が出てくるのです。

C、それはあくまでも、自分たちの知識の体系下における知識量が他者より多いということに他なりません。D 自分の知の体系の外には、無知、無関心なのです。要するに「やたらにでかい井戸の中にいる蛙」に過ぎないのです。

だから、官僚たちはすぐに答えを出してきます。やたらにでかい井戸の中から回答を選択します。しかし、そこからは質問が出てきません。「もし、想定のような死亡率2%じゃないインフルエンザが来るとしたら、どうしたらよいだろう」といった疑問は、彼らの中には出てこないのです。

しかし、現実のリスク・マネージメントは、まさに「自分の知らない領域の自覚」に他なりません。過去に日本にエボラ出血熱がやってきたことはありません。もし、エボラが日本に入ってきたら、どのような問題が生じるのだろうか。分からない、分からない、と私らは問い続けま

す。問い続けて、いろいろな可能性を想定するため、質問を重ねていきます。

それを既存の知識で片付けようとするから、失敗します。官僚は現状説明をさせると極めて優秀ですが、将来起こりうる未知なる状況の想定になると、とても下手になります。しかし、リスク・マネジメントはすべからず、未来のリスク、新たに起こった現在のリスクに対して行なわれるので、「過去に起こったこと」の知識だけでは対応が十分にはできないのです。

つまり、構造的に、官僚はリスク・マネジメントが苦手な頭脳の持ち主なんです。

日本の官僚はすぐに、机上の空論で現場のあり方を規定しようとしています。

例えば、2009年の「新型インフルエンザ」のときは、10mlという十数人分の量のバイアルのインフルエンザ・ワクチンが製造、使用されました。その方が生産効率がよいというワクチン学者、ワクチン製造機関目線の決定だったわけですが、現場は困ります。集団接種することなく、清潔環境を保ったままで十数人分のワクチンを管理、運用するのは大変なのです。

そのくせ官僚は、インフルエンザ・ワクチン接種の優先順位を事細かに規定しました。そこには「公平性を保つため」という大義名分がありました<sup>④</sup>が、現実には極めて運用しにくい机上の空論に過ぎませんでした。

私は現場でバカバカしいと思いましたので、「ワクチンを必要とする患者は全員感染症内科外来に送ってください。こちらで専門家としてワクチンが必要かどうかを判断します。しかし、基本的にワクチンが『不要』な人はほとんど皆無なので皆打ちますけどね。どんどんさばかないと大きなバイアルの中でワクチンが余ってもったいないです。じゃんじゃん打ちましょう」と宣言しました。

残念ながら、日本にはまだまだ現場の感染症のプロが少ないため、多くの医者たちは「厚生労働省が指示した通り」に面倒くさい運用基準を遵守していました。現場のプロが、アマチュアに現場の運用方法を指南してもらおうというのは、なんとも情けない話です。

エボラ出血熱の診療は、1類感染症指定医療機関で行なわれます。そこにはエボラ・ウイルスを外に出さない特殊な病室や、宇宙服のような防護服は備えてあります。

しかし、例えば、孤独な個室に隔離されている患者が鬱<sup>うつ</sup>状態になったとき、診てくれる精神科医がいなかったりします。そういうイメージネーションが足りないのです。「患者の立場になったら、どういうところで困るだろうか」という「1」<sup>①</sup>ができないからです。

日本のリスク・マネジメントをよりよくしようと思うのであれば、我々の「無知の知」への自覚を高め、効果的な質問ができるような能力を育成していく必要があります。学校教育の段階から「答えを出す」ことに焦るのではなく、「答えが出ない問題」と取っ組み合うこと、質問すること、「分かったふりをしない」こと、が大事です。

それは効率が悪く、テストや受験の成功率を減らしてしまうかもしれません。しかし、それこそが、リスクと対峙するうえで本<sup>⑤</sup>当に必要な知性を涵<sup>かん</sup>養<sup>よう</sup>する方法であり、遠回りのように見えて、もっとも近道の方法なのです。

(岩田健太郎 『「感染症パニック」を防げ！ リスク・コミュニケーション入門』より)

〔注〕

※1 リスク・マネジメント……予期せず生じる危険や危機を事前に管理し、不利益を最小限に抑えること。

※2 涵養……少しずつ自然に養い育てていくこと。

問一 二重傍線部 a 「井の中の蛙」と似た意味のことわざとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、風前の灯火ともしび    イ、餅は餅屋    ウ、針の穴から天上を覗く    エ、昔取った杵柄きねづか

問二 空欄【 X 】に入れることわざとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、お茶を濁す    イ、飛ぶ鳥あつとを濁さず    ウ、海老で鯛をつる    エ、損して得取る

問三 二重傍線部 b 「にわか仕込み」、c 「すべからく」の言葉の意味として最も適切なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。

b 「にわか仕込み」

- ア、強制的に覚えさせられること    イ、積極的に習得すること    ウ、簡単に身につけること    エ、急いで準備すること

c 「すべからく」

- ア、当然ながら    イ、一般的には    ウ、全体として    エ、ほとんどは

問四 空欄

A

〜

D

に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、A 要するに    B やはり    C もし    D したがって  
イ、A むしろ    B そして    C さらに    D ところが  
ウ、A なので    B 例えば    C つまり    D さて  
エ、A だから    B なにしる    C しかし    D やはり

問五 傍線部①「医局の中の人はやりたい放題できましたし、その質が低くても、誰も問題にしなかったのです」とあるが、それはなぜか。その理由の説明となっている箇所を、解答欄の「だから」に続く形で本文中より十五字以上二十字以内で抜き出し、そのはじめとおわりの五字をそれぞれ答えなさい。

問六 傍線部②「同じ『無知の知』の欠如を構造的に持っています」とあるが、それはどのような点で「同じ」なのか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、自分の専門外のことを無自覚の内に片付けてきたことにより、狭く閉じられた「タコツボ」内の知識や情報しか得られずにいる点。  
イ、「タコツボ」の中にいるため、自分には何が理解できているのか、理解できていないのかという点がきちんと把握できていない点。  
ウ、自分の住む世界以外のことに関心を持ち、「タコツボ」の外へ出るためにはどうすればいいか、自分なりに考えている点。  
エ、ごく狭い範囲の専門的知識の量は豊富だが「タコツボ」外の世界には関心がない事態を改善するために、「チーム」を結成する点。

問七 傍線部③「『やたらにでかい井戸の中にいる蛙』に過ぎないのです」とあるが、このように筆者が考えるのはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、あらゆる問題の答えが予め決められているために、どんなに質問したとしても、常に適切で明快な答えを導き出すことができるから。  
イ、官僚は「質問に答える」という才能と訓練を有してはいるが、それは「問題解決の最善の方法を選択できる力」とは関係がないから。  
ウ、官僚は自分の体系下にある問題には的確に対処することができる一方で、体系外にある問題について対処することは得意でないから。  
エ、官僚は問題に対する知識量だけは群を抜いて多いが、知識体系の外部にある領域への関心がなく、未知の状況の想定ができないから。



三 次 の 文 章 を 読 ん で 、 後 の 各 問 に 答 え な さ い 。

小学五年生のハルは、夏休み初日に一人でコンビニエンスストアへ出かけた時、二か月前から家に帰ってこなくなった父に呼び止められる。父は母（父にとっては妻）に電話で「ユウカイ」宣言をし、二人はそのまま旅に出る。さまざまな経験をともにしながら続けた旅も、資金難から限界を迎え、ハルは母のもとへ返されることになった。

駅についておとうさんは切符を買う。日なたに立ち、太陽の攻撃を受けながら、なんと言うべきか考える。もっと逃げよう、そう言ったらおとうさんはなんと言うだろう。今度は私がユウカイ犯になる。きみにはある程度自由はあるけれど、主導権は私にあるんだからな。でも、主導権を握って私はどうしたらいいんだろう。

切符を買ったおとうさんがこちらを向く。お財布におつりをしまい、買ったばかりの切符を見ながらこちらに歩いてくる。のどの奥がからからにかわいている。心臓がばらばらになって体じゅうに散らばってしまったみたいに、体全部、どこもかしこもどきどきしている。

「一時三十五分だって、あと二十分くらいあるけど、どうする、なんか食うか」

おとうさんがきき、私はふいと横を向く。

「混んでるみたいだから、ホームでならんでるか」

おとうさんは改札に入っていく。しぶしぶあとについていく。

ホームは人でいっぱいだった。みんな夏休み特有のにおいを発散している。日に焼けた子供たちが走りまわり、おかあさんたちがどなり、おとうさんたちは眠たげに新聞を読んでいる。カップルは真冬のさなかみたいにくっつき、グループ連れは大声で話しあう。おとうさんは私を家族連れのうしろに合わせ、ジュースと弁当を買ってくると言う。

「ジュース、何がいい？ 炭酸か、果汁か」

おとうさんがきくが私は横を向く。

「てきとうでいいな」

おとうさんは言い残して去っていく。私がおとうさんの段取りの悪さとかかっこ悪さになれたように、おとうさんも私の不機嫌モードになれてしまったらしい。無視なんて、ずっと前、最初に電車に乗ったときにやった方法と同じじゃないか。進歩していない自分がうらめしいが、どうしたらいいのか私にはわからない。おとうさん私はオレンジ、炭酸入ったオレンジじゃないよ、それからビールはやめときなね、トイレいき

たくなるからね、なんてにこにこ笑って言う気分になれそうもない。

私の前にならんでいる家族連れの、おとうさんとおかあさんはホームにすわりこんでいる。山歩きをしてきたらしく、二人ともリュックを背負い、登山靴をはいている。子供はおにいちやんが二年生くらい、妹が幼稚園くらいで、両親のまわりをくるくる走って笑い転がっている。私に気づいたおにいちやんが、両親の陰に隠れて、あかんべをしてきたり、イーだと歯を見せたりするけれど、やりかえす余裕が私にはない。妹もまねをして、あかんべ、イーだをくりかえす。両親はこちらに岩のような背中を向けたきり動かない。ばーか、と私に向かっておにいちやんは口を動かす。その横で妹は狂ったようにあかんべをしている。

いいなあ。ふと、そんなことを思う。

一分たりとも遅れずに電車はホームについた。人の波にもまれるようにして電車に乗りこむ。ぎゅうぎゅうづめだ。私はおとうさんのおなかに顔を押しつけていなければならぬ。弁当どころじゃないな、頭の上でおとうさんの声がきこえる。電車が走りはじめると、赤ん坊の泣

く声はどこからきこえてくる。かと思えばと唐揚げの湿ったにおいもする。かと思えばと唐揚げの湿ったにおいもする。赤ん坊の泣

「だいじょうぶか、息、できてるか」

おとうさんの声はその合間から降ってくる。

無視なんかじゃだめだ。不機嫌なまま、黙っていたら家まで連れていかれてしまう。何か、何か言わなければだめだ。私はおとうさんのおなかに顔をこすりつけるようにして、上を向く。おとうさんと目があう。

「おとうさん、私、少しなら貯金がある。子供のころからのお年玉、ほとんど使ってなくて、おかあさんがいつも郵便局に預けてくれるんだよ。だから少しじゃないかもしれない。それ、使ってもいいよ、だから、さ、このまま逃げよう」

私のとなり立っていた、おなかのつきでたどこかのおやじが私を見おろす。かまわず続ける。

「おかあさんには私が電話する。貯金通帳送って電話する。だめだと言って言うと思うけど、なんか言っておどして送らせる。だから」

「しいつ」おとうさんはデブおやじの視線に気づいて指を口にあてた。

「逃げよう」私は少しだけ声を落とす。

おとうさんを見上げるが、おとうさんは首をふる。もう逃げる必要はなくなったんだよ、と、かがんで小さな声をだす。

電車が駅にとまり、人がおり、少しだけ体のまわりにスペースができる。おとうさんのおなから顔を離して息を吸いこむ。背伸びをして車内を見まわすと、あかんべきょうだいと両親はすっかり席にすわっている。女の子のほうはおかあさんの膝に顔を埋めて眠ろうとしている。

た。電車はまた、走りだす。

②「つぎの駅できつとまた人がおるから」

そう言うおとうさんの声をさえぎって、私は言った。

「私きつとろくでもない大人になる」

「え？」おとうさんがかみこんで私の口に耳を近づける。私はもう一度くりかえした。

③「私はきつとろくでもない大人になる。あんたみたいな、勝手な親に連れまわされて、きちんと面倒みてもらえないで、こんなふうに、いいにおいのおいしそうなものを鼻先に押しつけられて、ぱつと取りあげられて、はいおわりって言われて、こんなことされてたら私はろくでもない大人になる。自分たちの都合で勝手に私のことを連れまわして。おとうさんのせいだ。おとうさんたちのせいだからね」

私は泣かなかった。思いきりかんだわさび漬の味が思い起こされたけれど、涙はでてこなかった。顔が赤くなるのがわかった。私は怒っているのだと、心のどこかで思っていた。

私の訴えについておとうさんは何も答えなかった。じつと私を見おろしていた。おとうさんが目をそらさないのも私もそらさなかった。つぎの駅が近づくとおとうさんはふいに私の手を取り、

「おりよう」

低く言っ引っぱった。

つぎの駅でもまたたくさんの人がおりました。おりて、おとうさんが私の願いをきき入れて、またどこかへいくのだと思っていたが、おとうさんはホームに突っ立ってじつと私を見ている。人々は笑い声をあげながらずらずらと改札に向かい、

「お、おれはろくでもない大人だよ」

片手に飲み物の入ったビニール袋、片手にお菓子とお弁当が入ったビニール袋を持ったおとうさんは、私の前に仁王立ちになってそう言った。何を言われているのかわからなくて、私はおとうさんを見あげた。

「だけどおれがろくでもない大人になったのはだれのせいでもない、だれのせいだとも思わない。だ、だから、あんたがろくでもない大人になったとしても、それはあんたのせいだ。おれやおかあさんのせいじゃない。おれはあんたの言うとおり勝手だけど、い、いくら勝手に無責任でどうしようもなくでも、あんたがろくでもないのはそのせいじゃない。④そ、そんな考えかたは、お、お、おれはきらいだ」

おとうさんは興奮しているらしく、最後のほうで<sup>※</sup>もった。

「きらいだし、かっこ悪い」

私はおとうさんを見ていた。おとうさんが黙るとあちこちでせみの鳴きわめく声がかきこえた。

「責任のがれがしたいんじゃない。これからずつと先、思いどおりにならないことがあるたんびに、な、何かのせいにしてたら、ハルのまわりの全部のことが思いどおりになくてもしょうがなくなくなっちゃうんだ」

おとうさんはそこで言葉を切った。そしてビニール袋からオレンジジュースをだして、乱暴に私に押しつけた。人のいないホームで向きあつたまま、おとうさんはビールを、私はオレンジジュースを飲んだ。ジュースはぬるくなって、よけい甘ったるかった。せみが鳴き、鳴きやみ、また鳴いた。

「おれはこの数日間ものすごく楽しかった。ハルといっしょで楽しかった」

おとうさんは口のはしにビールの泡をつけて言った。小さな子供がえげって宣言しているみたいにきこえた。

「私も楽しかった」

小さな声で、私は言った。

おとうさんがビールを、私がジュースを飲みおわったときつぎの電車がすべりこんできた。たくさん人はおりたけれど、それでも車内は混んでいた。さつきの電車がもう一度きたのではないかと思うほど、さつきとよく似た人たちが乗っている。相変わらず赤ん坊の泣き声がかきこえ、香水とサン・オイルと唐揚げのにおいがした。座席にすわった、日に焼けた子供たちは眠りこける両親の合間でちよつかいをだしあい、髪の毛の長い女の人が男の人に寄りかかって口を開けて眠り、おしゃぶりをくわえた小さな子供がおかあさんの胸で眠っていた。混んだ電車の中、おとうさんは私の手を握った。⑤私も握りかえした。

いいにおいのおいしそうなものを鼻先に押しつけられて、ぱつと取りあげられたんじゃない、私はそれを、心ゆくまで食べたんだ、たらく食べたんだと、急に思った。電車は右に揺れ左に揺れ、子供たちの歓声と女の人のかん高い笑い声が響き、私とおとうさんはしっかりと手を握りあつて立っていた。

駅についた。あたりはもうすっかり暗くなっていて、駅の白い明かりが、ロータリーを照らしている。買い物袋を下げた女の人や、塾のかばんを持った子供たちが、白い明かりの中をいつたりきたりしている。うちまでいっしょに誘ったけれど、おとうさんは、遠慮しておくと答えた。

「またユウカイしにきてね」私は言った。

「おう」おとうさんは大きすぎるサングラスをかけて笑った。

「じゃあ」私は手を顔の位置に持ちあげて、ゆっくりとふった。

「またな」おとうさんは私の肩をぽんと軽くたたいた。

たくさんの人が行き交うロータリーに足をふみだす。私はユウカイ犯から解放されたのだ。まっすぐあごをあげて、日に焼けた足や手を大きくふりまわして、ずんずん歩く。帰ったらお風呂に入ろう。汚くてくさいこの体を、長い時間かけていねいに磨こう。それからアイスを食べながらテレビを見よう。テレビなんてものすごくくひさしぶりだ。ゆうこちゃんに電話をかけてもいい。ゆうこちゃんにだけは、この数日間のことを教えてもいい。足がとまらないように、帰ったらすることをとぎれないように考えながら歩いた。

ロータリーのときれ目まで歩いて、角を曲がる時、ふりかえった。改札から吐きだされたり駅前を歩き来する人々の合間に、まだそこに立っているおとうさんが見えた。おとうさんは立ちどまった私に気づいてサングラスを外し、手をふった。

遠くで手をふる小さなおとうさんは、他人みたいだった。まわりにいるそのほかの、赤ん坊を肩車したポロシャツの人や、女の人と腕を組んだ茶色い髪の人や、スーツを着た眼鏡の人と同じように、知らない人となんのかわりもなかった。だけど、人の合間に隠れてはあらわれる、薄汚れたTシャツ姿の、日に焼けた、目尻の下がった男の人は、不思議とぴかりと光って見えた。まるで金色のカプセルにつつまれているように。駅の明かりのせいじゃない、キョスクの明かりのせいじゃない。

そして思った。おかあさんがはじめておとうさんを見たとき、きっと、おとうさんはこんなふうに見えたんだろう。たくさん人がある中で、一人だけ、特別にぴかりと光って。

私は、あそこに立っている、いつまでもばかみたいに手をふり続けている男の人が大好きだと思った。見知らぬ人とかわりなくても。心の中でそのことを確認してから、私は大きく息を吸いこみ、角を曲がった。

(角田光代『キッドナップ・ツアー』より)

〔注〕 ※1 どもつた……「どもる」とは、話し言葉が滑らかに出てこないこと。言い出しの音がすんなり発音できなかったり、同じ音が

何度も繰り返されたりする。

※2 キョスク……JRの駅構内にある売店。

※3 キッドナップ……英語で「誘拐」の意。

問一 空欄 A C に入る言葉として最も適切なものをそれぞれ次から選び、記号で答えなさい。ただし、同じ記号を二度以上選ばないこと。

ア、猛烈に イ、唐突に ウ、おもむろに エ、本当に オ、あつという間に

問二 傍線部①「私はふいと横を向く」とあるが、このときのハルの気持ちはどのようなものか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア、主導権を握って行動しようとする自分がどがかわく程緊張して決意したのに、おとうさんはそれに全く気づかずマイペースで動いてしま  
うので、無力感とかなしみにおそわれた。  
イ、自分がおとうさんと一緒にいるためにユウカイ犯になろうとまで思い詰めているのに、おとうさんはいつも通りののんきな会話をし  
てくるため、呆れて返事をする気がしない。  
ウ、このまま旅を続けたいという思いをどう告げたらいいか自分は必死に考えているのに、おとうさんは帰ることを当然視して日常的な会  
話をしてくれるので、不本意に感じている。  
エ、自分もつと逃げたいと願っていることをおとうさんは承知しているのに、それを受け止めないまま帰る方向でどんどん行動してしま  
うため、無視によって怒りを表している。

問三 傍線部②「つぎの駅できつとまた人がおるから」とあるが、このときのおとうさんの気持ちはどのようなものか。その説明として適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア、旅はもう続けられないのに聞き分けがないハルに困り、何とかなだめようとしている。  
イ、逃げ続けたいというハルの願いの切実さに打たれ、次の駅で話し合おうと思いついた。  
ウ、ハルが電車の混雑の中で「逃げよう」などと言ってくるので、人目が気になっている。  
エ、旅を続けようというハルの気持ちは分かるだけに、まともに取り合うことができない。

**問四** 傍線部③「私はきつとろくでもない大人になる」とあるが、このときのハルの気持ちはどのようなものか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、自己中心的な行動に付き合わされて成長した子どもは親の愛情を知らない被害者であるが、大人になってから同じことを繰り返してしまっていると訴えている。
- イ、旅に連れ出すのも終わらせるのも親の気分次第で、従う立場である子どもは心身がゆがんでしまうとおどすように言うことで、気づかせようとしている。
- ウ、子どもの面倒をろくに見ず、自分たちの身勝手に操るような親にそのまま流され続けていたら、きちんとした大人になれないのではないかと焦っている。
- エ、親の都合で振り回しておいて、子どもである自分の気持ちは正面から向き合ってくれない様子に納得できず、一歩もゆずれない位の憤りを覚えている。

**問五** 傍線部④「そ、そんな考えかたは、お、お、おれはきらいだ」とあるが、

- (一) このときのおとうさんの気持ちはどのような体勢となつて表れているか。その表現を五字以内で抜き出さない。
- (二) おとうさんはハルにどのような考えかたをする人になつてほしいと望んでいるのか。解答欄の「という考えかた」に続く形で、本文中の表現を用いながら三十字以上四十字以内で答えなさい。ただし、句読点・記号等も字数に含むものとする。

**問六** 傍線部⑤「私も握りかえした」とあるが、このときのハルの気持ちはどのようなものか。その説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、わざわざ電車を降りてあるべき考えかたを自分に示してくれた後、この数日間がかけがえのないものだったと二人で確かめ合うことができ、別れ際はせめておとうさんが喜ぶように行動しようと思った。
- イ、自分を正そうとして興奮してどもったり、自分との旅の楽しさをえばつたように言ったりするおとうさんに接し、不器用で子どもっぽいが悪い人ではなく、親なのだから受け入れていこうと思いはじめた。
- ウ、電車を乗り換えてまで間違つた考えかたを注意してくれたおとうさんは、混みあう車内で他の乗客から自分を気遣うなど、おとうさんなりに自分を愛していると知り、今までの身勝手を許す気になった。
- エ、いざというときには本気で叱ってくれたり、自分と過ごした時間を意味のあるものと捉えているおとうさんの姿を見て、自分は大事にされていないわけではないと分かり、あたたかい気持ちになった。

**問七** 傍線部⑥「足がとまらないように、帰ったらすることをとぎれないように考えながら歩いた」とあるが、ハルがこのように行動するのはなぜか。その理由の説明として最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア、おとうさんと別れるのはなごり惜しいけれど、あえてそれを振り切つて、もとの生活に意識を持つていこうと努めているから。
- イ、おとうさんとの時間は楽しい一方、金銭的な不安があつたため、おかあさんとの安定した生活が恋しく思い出されてきたから。
- ウ、おとうさんとの旅を満足して終えた今は、もとの日常生活のよさが途端に実感され、やりたいことが次々に浮かんできたから。
- エ、おとうさんと過ごした充実感があるからこそ、今度は旅を終えて一人になった解放感を、思いきり味わいたくなっているから。



